

坪内士行宛葉書

本資料は、財団法人逍遙協会^①が所蔵していたものである。平成二十四年に財団法人登録抹消に伴い、その所蔵品を早稲田大学演劇博物館に移管した。そのうち坪内士行宛書簡三十四通をここに翻刻し、紹介する。書かれた時期は明治から昭和に亘っており、明治期のものはかなり劣化が激しい。また海外在住先に送られたものも多く、判読困難なものも多々あることをご了解願いたい。紹介の順序は年代順とし、年月不詳のものは末尾に記した。

記載は年月日、差出人、筆記形態、本文（表裏）、住所（差出人・宛先）、消印、解説、演劇博物館所蔵番号の順に記した。差出人が号を使用している場合はそれに従い、人物解説で本名を記した。判読不可の文字は□とした。また絵葉書の場合、キャプションがあれば記し、絵柄が文章内容に関連する場合は、簡単に記した。裏面に文章があれば□で記した。差出人（重複の場合は、初出時）はわかる範囲で短い人物解説を記載し、必要な場合はその後の内容について補足を加えた。仮名遣い・漢字は出来るだけ原文にしたがった。英文も含め誤記と思われる文字も原文通りとした。句読点は判読できるものは原文通りに施した。改行については葉書のため膨大

濱 口 久 仁 子

な回数となる。よって頁数増幅を避け読みやすさを考慮して、必要と思われる箇所以外は改行を無くし続けて記載した。宛先は海外が多いため判読困難なものも多いが原文に従い、場合によっては調査し推測した。日付は葉書に記載されている場合はそれを冒頭に掲げ、消印は本文末尾に記載した。差出人の著作権が有効な場合、可能な限り継承者の許諾を得た。確認できなかった人物もあるが、御存知の方は御一報願いたい。

翻刻に先立って簡単に坪内士行について記しておく。

坪内士行

明治二十年（一八八七）愛知県名古屋市出身。坪内逍遙の兄義衛の子として生まれたが、七歳の時子供がいなかった逍遙の養子となった。逍遙の膝下では、同じく逍遙の甥大造や養女くにと共に、舞踊や音曲などの芸事を学んだ。明治四十二年早稲田大学英文科を卒業後、ハーバード大学に学ぶ。さらに英国へ渡り学問と共に演劇を学んだ。西欧で多くの知識を得て大正四年帰国。早稲田大学文学部で教鞭をとった。大正七年、小林一三の招きで宝塚音楽学校に着

任。これがきっかけで宝塚少女歌劇一期生だった雲居浪子と結婚する。長女はのちに女優となった坪内ミキ子である。この時期、様々な状況から逍遙との養子縁組を解消した。大正十五年に宝塚国民座が創設されると演出や脚本などに携わる。宝塚国民座の解散（昭和五年）の後は東京に戻り、東京宝塚文芸部、東宝劇団、東宝芸能事業会社などで要職を歴任した。昭和二十七年からは早稲田大学で再び教鞭をとり、傍ら日本舞踊界でも評論やコンクール審査員などを勤め、その発展に貢献した。昭和六十一年（一九八六）九十八歳で逝去。

坪内十行宛葉書

一、明治四十三年 一月一日 東儀季治 ペン書

謹賀新年

四十三年 元旦

東儀季治

〈住所・宛先〉 U.S.A

〈消印〉 □・1・1

（裏面）早稲田大学対ウイスクンシン大学野球戦（第三回）

東儀季治 明治二年京都生まれ。明治・大正期の雅楽家・作曲家。号は鉄笛。俳優。早稲田大学中退。文芸協会などで活躍。早稲田大学校歌「都の西北」の作曲者としても知られている。大正十四年死去。

（041978/021）

二、明治四十三年 一月十日 橘静二 ペン書

新年おめでとう

四十三年 わせだ

たちばな生

〈住所・宛先〉 U.S.A

〈消印〉 2・1・10

（裏面）早稲田大学対ウイスクンシン大学野球戦（第三回）
写真 （041978/024）

橘 静二 早稲田大学卒業。雑誌「大学及大学生」の編者。

高田早苗の早稲田大学総長時代秘書をつとめた。

三、明治四十三年 四月二日 坪内信 ペン書

大学の帽章のよいものではなく、こゝに書きくづしの葉書があった

失敬ではあるが、私の下手な僕故画くのも困るし ゆるしてくれ給へ

兄上の御健康を祝る

弟より

兄上様

〈住所・宛先〉 無し

〈消印〉 無し

（裏面）総長大隈伯 伯爵夫人 写真

坪内信 明治二十四年生まれ。士行の弟。早稲田大学理工学部教授。雑誌「無線電話」主幹。大正十五年死去。

(041978~023)

四、明治四十三年 一月二十五日 平野履道 ペン書

恭賀新年

両度の御懇書有がたく拝見仕候

当方よりは早速御答へも申上げず欠礼御宥如願上度候

御無事御着米御勉強何より欣賀申上候

此頃中村春雨君帰朝せられ新年の歌舞伎座評本日の東京朝日に在り最新西洋劇通の評として面白く読了致し候

東京にて

平野履道

〈住所・宛先〉 U.S.A

〈消印〉□・1・25

(裏面)花見山茸狩写真

平野履道 明治五年岐阜県生まれ。号は柏蔭。早稲田大学英文科卒業。「早稲田文学」に入り、文芸評論など手がけた。

長男は評論家の平野謙。昭和十九年死去。

(041978~030)

五、明治四十三年四月二日 坪内義衛 ペン書・毛筆

愈御壮健欣賀候 此□老生方及両親其他とも

一同平安 御休意相成度 信中学卒業ニ付遠方

心ニかけられ何よりの品御送与ありかたく当人共々大悦ひいたし候

追々春和ニ入り 各所の桜花紅唇を破りかけ

何となくのとかニ 諸谷そめ申し候

御地はまだ寒き事ならん 折角御自愛 研学切ニ祈念いたし

候 幸便に付

老人よりも一筆 如斯不一

四月四日 夜 義衛

〔裏面記載〕 コノ問教エテ上ゲタカドーカ忘レタカラ村上サンの address Herru Dr.K Murakami Weender Chaussee

41 Göttinger Dertschand

〈住所・宛先〉 未記入

(裏面)陸上大運動会記念43・4・2「端艇部 弓術部」弓矢とボートの写真

坪内義衛 嘉永三年岐阜県生まれ。官吏。坪内士行の実父、逍遙の次兄。明治二十八年まで愛知県庁に勤務。八子をもうけ、その五子が士行である。大正十三年死去。

(041978~012)

六、明治四十三年 四月三十日 仲木貞一 ペン書

「労働者」になるのだ、「物品」になるのだ、「人間」の名残

に泣かう 泣かう

四月之末之日 貞

「裏面記載」纏まり過ぎた顔ですね、けれども縞柄の荒いのが、い、ぢやありませんか、

小さく纏まつてゐる、小さく纏まつてゐる

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉43・4・30

（裏面）少女の写真

仲木貞一 明治十九年石川県生まれ。劇作家、編集者。早稲田大学英文科卒業。読売新聞社に入社、その傍ら秋田雨雀らと「劇と詩」創刊。その後芸術座、新国劇、NHKなどで様々な仕事を手がけた。昭和二十九年死去。

(041978~029)

七、明治四十三年八月二十七日 五十嵐力 ペン書

久しくご無沙汰御ゆるし被下度候 東京ハ今になって毎日九十度以上の暑さに候 其後御障りもあらせられずや
本月十日以後今日にわたる東京中心の大洪水ハ正に御承知に候べし

これは裏面的一幕に候 折角御自愛 御勉強を祈上候
不勿

八月廿七日 五十嵐力

「裏面記載」夏目漱石氏危篤の□昨日の新聞に見之候

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉43・8・27

五十嵐力 明治七年山形県生まれ。号は甲鳥園、巴千。東京専門学校（早稲田大学）卒。「早稲田文学」編集に携わった後、東京専門学校講師、早稲田大学国文科主任教授、文学部長を務めた。逍遙の創設した文芸協会では発起人に名を連ねた。昭和二十二年死去。明治四十三年八月は、東日本の一府十五県を襲った大水害があった。(041978~002)

八、明治四十三年八月二十九日 島村民蔵 ペン書

あんな作でも読んで呉れたのか、忝いと云ふより外はない、君のやうに云って呉れると如何様に励みになるか知れやしない（笑給ふな、イブセニズムを撤回したくなった！）やるよ、やるよ、大にやるよ、実を云へば悪口を云ふ筈の君から彼様云はれたので、聊か不足でないでもないが、考へて見ると、我なから、少々身勝手だね。だが、此次には是非悪口を願ふよ

雑誌の相談はお流れ、漱石修善寺にて胃病重態、本日、日韓合邦の詔書突発、人気湧くが如し

八月二十九日 大磯にて 民蔵

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉10・8・30

〔裏面〕（大磯八景之内） 鳴立澤 遠藤写真館製版 写真

島村民蔵 明治二十一年東京生まれ。号は甲鳥、柳水。早稲田大学英文科卒。東京帝国大学独文科中退。逍遙に師事し、劇談会々員でもあった。劇作、演劇研究、イブセンなどの近代戯曲の翻訳を手がけた。早稲田大学、日本大学で教える。戦後は静岡女子短期大学教授。昭和四十五年死去。この年の八月、韓国併合、日韓併合条約調印。また夏目漱石が胃潰瘍のため療養先で吐血し、「修善寺の大患」と呼ばれた。

（041978～011）

九、明治四十三年 九月九日 差出人不明 ペン書

東京の洪水、一寸目ざましいものでした、何でも篁村翁か大久保の御宅へ轉げ込まれた筈です

〔裏面記載〕事実はこちら以上だと云ひます

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉10・9・□

（裏面）写真（明治四十三年八月東京大洪水ノ実景）浅草公園の写真

（041978～0003）

十、明治四十四年一月一日 巖谷季雄 印刷年賀状 宛名ペン書

新年おめで度う存じます

巖谷 季雄（四二）同 勇子（三三）

同 三一（一一）同 三四子（九）

同 三八子（五）同 榮二（三）

厄年もふうふ、そろへば吹消して

親子六人無事にゐる春

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉43・12・31

（裏面）家族写真

巖谷季雄 明治三年東京生まれ。作家、児童文学者。号は、小波・漣山人。医者の家系に生まれたが、文学を志し、文学結社の硯友社に入る。おとぎ話、児童劇、童話口演を多く手がけた。逍遙の朗読会にも参加している。童謡「ふじの山」「一寸法師」の作詞者。昭和八年死去。

（041978～0006）

十一、明治四十四年四月十六日 島村民蔵 ペン書

九日の夜、北東京に業火が燃えて歓楽境は全滅した、夜桜委じてさくら炭となる色即空などとは、我ながら陳い／＼

四月十六日 島村生

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉不明

（裏面）（明治四十四年四月九日）新吉原大火の惨状 仲ノ町〈注〉この年、吉原の「美華登楼」から出た火は、浅草一帯から

南千住までを焼き尽くした。

(041978~0008)

十二、明治四十四年 十二月二十二日 島村民蔵 ペン書

a happy new year!

俺はこの暮に酒の飲めぬ病気でしよげてゐる、あわれゴノロエヤ。

「シバキ」は一日から出る 何かよこせ、「蜜柑の皮」といふのをよんでくれ、

来年から大活動をやる、此間の「アルバムから」といふのは吾輩の代筆さ、

あんなものまで読むのか、感心だよ。

「裏面記載」 僕の大好きなフィスク夫人の少し横向きなら尚好い、好い

シヤシンを送ってくれ、大きい程結構だ。

さうさう あの原稿は新小説へやってあるが出ないから取戻して「シバキ」へ出さうと思つてゐる。

(この絵なら senzuri がかけるだらう。)

〈住所・宛先〉London

〈消印〉 41・12・22

(裏面)女性の写真

(041978~025)

十三、明治四十五年 二月□日 中島半次郎 ペン書

一夜赤いカアテンの影でわきがの匂ひにうなされる 金があつたら、祖国の友のために “funny's first play” -show を買つて 送れ。

序に貴様の mara でも 写真にとつて送れ。縁喜棚へ祀つてつかはす ナカ生

(裏面) Yes sir, thank you Miss Teruha

〈住所・宛先〉 London

〈消印〉45・2・2

中島半次郎 明治四年熊本県生まれ。東京専門学校(早稲田大学)教授。早稲田高等学院の初代学院長。「人格的教育学の思潮」でドイツの人格的教育学を紹介、提唱した。大正十五年死去。
(041978~031)

十四、明治四十五年 五月二十九日 島村民蔵 ペン書

もう巴里へ飛んで仕舞つたかしら、今迄はマダム晶子に

吹き飛ばされてあるのぢやないか。「シバキ」へ毎度通信御苦勞 タイムスの礼は如何した、中谷は待焦れて最早半分黒焼になつてゐる。此頃森濫決博士が誤訳問題で向軍派に散々にやつつけられてゐる、痛快々々々々。

未だ手紙が書けぬからハガキで許して貰ふ、不相変

der lebendye Deichuan i

中耳炎兼神経衰弱患者を哀れと思へ 英国の風流紳士!

五月二十九日 民蔵

〈住所・宛先〉英国

〈消印〉□・5・30

〈注〉「シバキ」は明治四十五年に楠山正雄を編集長として中谷徳太郎・長谷川時雨らが関わった雑誌。

(041978~022)

十五、大正二年八月二十三日 市川又彦 ペン書

去廿日当地に着仕候 貴兄の御渡英はいつ頃に候や 恐くは
真暑に候へど東京の十月初旬の時候に御座候

michikawa

〔裏面記載〕八月二十三日 又彦生 nippon yusen kaisha
s.s. "aki maru

〈住所・宛先〉U.S.A

〈消印〉aug 23・10

市川又彦 明治十九年東京生まれ。英文学者。早稲田大学卒業後、英国留学。博文館に入り「英語世界」を編集。坪内逍遙に師事し、一九二六年早大講師、のち教授。バーナード・ショーを主として研究・翻訳した。昭和五十七年死去。

(041978~016)

十六、大正二年八月三十日 市川又彦 ペン書

度々御端書多謝。六拾円とる ことしの□いかな。

僕は武器と人を本にしようにと思ふが舞台面が是非欲しい
例の絵の雑誌でもよし それがなくバ絵はがきでもよい。面倒だらうが尋ねて至急送ってくれないか 金は分らないから
送れぬではないか、それからガルスワシー、ダーリー、バーカー、ペンネットの絵葉書もほしい
此の二人のハたしかにある

八月卅日 牛込北町三 又彦

〔裏面記載〕まんちゃんが好きなら静ちゃんを贈る

〈住所・宛先〉England

〈消印〉不明

〈裏面〉女性の写真

(41978~007)

十七、大正二年 十一月二十一日 寄せ書き ペン書

伊地知純正／今泉□□／日高只一／百上□治／高田早苗

橘静二／服部嘉香／金子従次／吉江喬松／中村仲／片上伸

坂田貞治／相馬昌治／□□嶋生

〔裏面記載〕母校の若い人々の月次会に特に学長を御招きした
席から

〈注〉鉛筆書き

〈住所・宛先〉London

〈消印〉2・11・21

(裏面)祝典当日 早稲田大学(創立三十年の印あり)

(041978\033)

十八、大正三年七月十四日 島村民蔵 ペン書

命あつてロオマの旅や夏やする

さふいふ感はありませんか、とにかく命みようがな奴だなあ
といふ奴さね。五年も六年も面を見せない友達に己にとつて
生きるも死ぬも同じことだからなあ。

〔裏面記載〕芸者にしては野暮洋売ニしては不きれう、

娘にしては自堕落なるもの、これを女優といふ

〈住所・宛先〉London

〈消印〉15・7・14

(041978\028)

十九、大正三年 十一月二十三日 坪内逍遙他寄せ書き ペン書・

毛筆

これはつい此間金子 中桐 中島 紀 五十嵐 長谷川、

宮田 杉谷を招きし折の 署名也 put□□ of me!a

番附入書状入手 いつれ近いうちに 返辞可書候

〔裏面記載〕大正三年十一月廿三日 逍遙

署名 代水 宮田 天溪 力 金子生 中桐生 紀生

中島半次郎

〈住所・宛先〉England

〈消印〉消印 不明

(裏面)坪内逍遙写真と逍遙揮毫二枚

(041978\034)

二十、大正四年十二月□日 東儀季治 ペン書

御書面拝見 四月の件 案外容易に相纏まり 至極結構存候
早速先方へ正式の申込を可致候 又御申込の件々 委承知仕
候

なほ正月の台本 何卒来十五日迄に御送り被下度願上候

牛込戸山ヶ原 東儀季治

〈住所・宛先〉麹町区三年町二 佐藤別宅

〈消印〉4・12・□

(裏面)羊毛刈りの写真 Shearing の印刷あり

(041978\013)

二十一、大正七年八月二十四日 片上伸 ペン書

とうとうここまでやって来ましたが、もう秋のやうで

ひやくと風が吹き水のやうなつめたさに何となく辺土の悲

しみを身ニ感じます、

月末ニハ帰京のつもりです 御健康を祈ります

釧路にて 片上 伸

八月廿一日

〈住所・宛先〉東京市麹町区三年町十七 佐藤別宅

〈消印〉 7・8・24

片上伸 明治十七年愛知県生まれ。文芸評論家、ロシア文学者。号は天弦。東京専門学校（早稲田大学）に学び、「早稲田文学」編集をへて早稲田大学教授。大正四年に早大にロシア文学科を創設。二度目のロシア留学の後、脳溢血により昭和三年、四十五歳の若さで死去。（041978-0005）

二十二、大正八年□月二十八日 本間久雄 墨書

本日妻から手紙で大兄御いで下さったと云つてきまして
いろ／＼頂戴ものをしたさうですが有りがたく存じます、
三十日にはかへりたいと思つてゐます
委細ハ拝眉にゆづります。

不取敢 御礼まで ひさを

〔裏面記載〕 米沢の有名なタチツケ姿です

野趣に富んでゐるところが特色です

〈住所・宛先〉東京市京橋区鍛冶橋 鍛冶橋旅館

〈消印〉 8・□・28

（裏面） 米沢風俗（タチツケ姿）写真

本間久雄 明治十九年山形県生まれ。英文学者、国文学者、文学博士。早稲田大学英文科卒。「早稲田文学」主幹。早稲田大学文学部教授、のち名誉教授。大学在学中から逍遙の感

化を受け、昭和四十二年以来財団法人逍遙協合理事長として、逍遙の著作整理や調査にあたった。

米沢は本間の郷里である。（041978-0014）

二十三、大正八年九月七日 武田豊四郎 ペン書

残暑難□の候 大兄益 御情安の御事と存候
今回高井嬢と御結婚の趣拝承慶賀此事に御座候
小生事七月廿日東京を発し加賀越中佐渡越後の四国に 印度の学術趣味普及のプロパガンダを印度服つけて致し居り
やうやく八月四日帰京仕り候 次第にて祝辞延引失礼の段御
海容被下度候

東京市小石川区関口町一八七番地 一如洞 武田豊四郎
大正八年九月七日 早朝

〈住所・宛先〉 大阪府箕面村櫻井

〈消印〉 8・9・7

（裏面） Third Hindu Ceremony at Shinobazu-Benten-dô,

29th may, 1917

prof.h.p.shastri.pr.f.t.takeda

武田豊四郎 明治十五年生まれ。早稲田大学文学部教授。専門は印度哲学。著書に「古代印度の文化」「仏教読本」など。また「大釈迦」などの印度を舞台にした演劇上演にあたって指導を行った。なお宛先は士行夫人と連名。

（041978-0027）

二十四、大正九年一月十四日 三島章道 ペン書

先日はお手紙ありがとうございました。丁度お手紙をいたゞいた日に東京をたつて、あちらこちらとさまよひつゝ、二三日

前、伊東から 小舟にのつてこゝへ参りました。

それでお返事をかきませんで失礼をいたしました お許し下さいまし。「友達」は編輯は私と私の所に居ります男と二人

でして居りますので もう入りませんのでございますが、どうしたら い、だらうと心配して居ります。

何かいゝことはないかと考へては居りますが、一寸見当がつか

きません。土方とも相談し、御本人ともおめにかかったら

少し見当がつくかもしれません。

とにかく「友達」の方は むつかしうございます。いづれ又

帰京の上にてくわしく御返事申し上げます

一九二〇、一、十四 大島ニテ 三島章道

〈住所・宛先〉大阪府豊能郡櫻井 新市街

〈消印〉不明

（裏面）大島風俗「渡島記念大島三原館」のスタンプ印あり

三島章道 明治三十年東京生まれ。学習院大学卒業。小説家・

劇作家・演劇評論家。子爵。貴族院議員・参議院議員。文部

政務次官。ボーイスカウト運動を日本に広めた人物として知られている。義弟は土方与志。昭和四十年死去。

（0419785015）

二十五、大正十年十一月二十三日 會津八一 ペン書

山田直君は土佐から

神戸に赴かれたる筈なるが

住所御存じならば御教示被下度候

御ねかいのみ

別府町濱脇

立花屋別荘にて

十一月廿一日 會津八一

〈住所・宛先〉 大和國 櫻井町

〈消印〉10・11・23

（裏面）（別府名所）海岸砂湯ノ実況

會津八一 明治十四年新潟県生まれ。美術史家・書家。号は

秋艸道人・渾斎。東京専門学校（早稲田大学）に入學し、坪

内逍遙や小泉八雲らの講義を聴講した。その後も逍遙の弟子

として愛顧を受ける。早稲田大学教授のち名誉教授。その膨

大な東洋美術コレクションや業績は早稲田大学内の會津八一

記念博物館に収められている。また新潟市にも記念館がある。

（0419785017）

二十六、大正十三年□月十五日 市川又彦 竹柴晋吉 ペン書

老博士にお目にかかりに当地に来ました、噂と違つて当地は
案外平穩です（市川生）

先生もなか／＼元気な様です

四月の末まではこゝに居らるゝとの事です

露木に泊っていますが、往年の事を一寸思出しました
十五日

(竹柴)

た。

(0419785004)

二十八、昭和五年一月一日 演劇博物館後援会 ペン書

〈住所・宛先〉 大阪府下箕面村櫻ヶ丘
〈消印〉消印13・□・□

賀正 本年も相変わらず御厚情賜はりたく願上候

(裏面)熱海御用邸 the detached palace atami

昭和五年 元旦

竹柴晋吉 慶応三年東京生まれ。本名平山留吉。歌舞伎狂言

東京 牛込 早稲田大学内

作者。両国の鳥料理の名店「坊主しゃも」の長男。河竹黙阿

坪内博士記念演劇博物館後援会

弥の最後の直弟子として入門。明治大正期の歌舞伎に新風を

会長 市島謙吉 理事長 長谷川誠也

吹き込んだ。昭和二十年死去。(04197850019)

〈住所・宛先〉大阪市外箕面村櫻ヶ丘

〈消印〉5・1・1

二十七、大正十四年七月四日 東儀季治 ペン書

演劇博物館 坪内逍遙の古稀とシェイクスピア作品全訳完成

先日は失礼いたしました

を記念して、昭和三年十月早稲田大学内に設立された。その

昨夜着阪 例のきしさわ座に投宿いたして居ります

運営支援団体として翌年演劇博物館後援会が設立された。

いづれ伺ひますが 不敢御報申上ます

逍遙自身の朗読会など寄付興行を催して、組織的財政的基礎

七月四日 東儀季治

(0419785001)

浪花座にて

〈住所・宛先〉府下箕面村 櫻井

二十九、昭和五年 十月二十七日 安部豊 ペン書

〈消印〉□・7・4

(裏面) (平博文化村住宅) 一間の家 (納戸浴室便所台所付

二十一日下阪

価格千九百八十円 出品人 生々園宏達弥氏)

二十四日茶臼山にて劇談会を

〈注〉年代は判読できないが、平和博覧会の開催年から推測し

二十六日 中座にて 新演藝の大演藝会。

二十七日・・・今日も亦三四百を返へす筈

新演藝もおかげで発展いたし居候

大阪では画報より三百八十部多く売れ申候（九月末調べ）

道頓堀にて 安部豊

〈住所・宛先〉東京小石川区高田老松町十七

〈消印〉5・10・27

（裏面）旗乃酒場 Cabaret de Pannon Osaka Japan

安部豊 明治十九年大分県生まれ。演劇評論家・編集者。雑誌「演芸画報」「演劇界」の編集にたずさわる。坪内逍遙始め五世中村歌右衛門、六世尾上菊五郎らに信頼され、その縁で芸談集「魁玉夜話」、写真集「舞台の団十郎」「五世尾上菊五郎」などを編集した。昭和三十二年死去。なおこのほかきは坪内士行・本間久雄の両名に宛てて書かれている。

（041978-018）

三十、昭和十一年三月五日 夏川静江 ペン書き

東京のあの大事件に京都ではいろ／＼なデマが入るので、案じて居りました。有楽街のニュース、又有楽座前の写真などみて、想像だに出来ない程でした。でも無事に済み、安心いたしました。

先生御入洛と思ってお越しがありませんでしたね、昨（二日）座談会でお目にかかれると思って居りましたのに残念でした。四日が今から楽しみです。京都は大変な寒

さです。

どうぞ御身御大切に、皆様によりしく。

京都にて 夏川

〈住所・宛先〉東京市小石川区新小川町 江戸川アバート

〈消印〉11・3・15

（裏面）「京都宝塚劇場夏川静江」の似顔絵付きゴム印あり

夏川静江 明治四十二年東京生まれ。六歳で近代劇協会の主宰だった上山草人に見出され、子役として初舞台を踏む。その後日活や東亜キネマなどの多くの映画に出演。東宝劇団にも参加し、看板女優として活躍した。平成十一年死去。なおこのほかきは、士行夫人との連名宛てである。東京のあの大事件は二・二六事件を指す。この時近隣の興行は三日間休演となった。

（041978-010）

三十一、昭和十一年八月二十日 加藤朝鳥 ペン書

お手紙拝見百万の援軍を得たるが如く心強し、白鷺のこと僕の今は経営の金の方ばかり心配

誌内容は籬が外れて居るんだからその点おふくみを乞う。

御光来下さる時は澁谷玉川線身延別院前下車

左坂のぼるとすぐ僕の茅屋です。

僕が出かけて行きたいが まあ一度多摩川岸を見てくれたまへ。

小林一三氏へよろしく願ひます。大山君には次の原稿は九月

七日まで、よい様御伝言を乞ふ

東京市世田ヶ谷区玉川瀬田一〇一 八反響社（スタンブ押印）
加藤朝鳥

〈住所・宛先〉麹町区有楽町二ノ一日本劇場内 東宝文芸部
〈消印〉11・8・20

（裏面）玉川の反響社

加藤朝鳥 明治十九年鳥取県生まれ。本名は信正。早稲田大学卒業。ジャカルタにて「爪哇（ジャワ）日報」主筆をつとめる。帰国後、評論・翻訳活動に専念。昭和五年レイモンド著「農民」の翻訳により、ポランド政府から黄金十章をうける。昭和七年から文芸誌「反響」を主宰した。昭和十三年死去。小林一三は関西の実業家。阪急グループ・宝塚歌劇団の創業者。
(041978\026)

三十二、□□年 十一月二日 島村民蔵 ペン書

先月来より療養かたぐい 当地へ来ました。

散歩する 度に貴兄のことを思ひます 十日計りで帰宅の上、今度出 来た詰らぬ書物を御笑覧に供します。文化事業は当分のうち現幹事丈で遣つて見るとのことでした。万事切り盛りは横山片山両氏がしてゐます。勿々
十一月二日

伊豆長岡にて 島村民蔵

〈住所・宛先〉大阪府豊能郡箕面村櫻井

〈消印〉不明

（裏面）伊豆長岡温泉 大黒堂の松

(041978\009)

三十三、□□年 十一月一日 榎茂都陸平 ペン書

拝啓

廿日午後二時くれなる丸にて出帆 昨廿一日午後三時半無事別府へ到着致しました

廿日余り入 湯の上帰らうと思つてゐます 開演の方よろしく御願します

奥様へよろしく

十一月一日 榎茂都陸平

大分県別府町浜脇海岸通住吉浜 泉文旅館別荘内

〈住所・宛先〉大阪府下豊能郡箕面村櫻井新市街

〈消印〉不明

（裏面）（別府名所）明礬温泉場全景 Whole View Myoban, Beppu

榎茂都陸平 明治三十年大阪府生まれ。二代目榎茂都扇性の長男。宝塚音楽歌劇学校教授となり、群舞「春から秋へ」で注目される。昭和三年榎茂都流三代家元をつぐ。ドイツで舞踊理論などを学び、新舞踊も創作発表した。昭和六十年死去。

(041978\020)

三十四、〇〇年 十月三十日 楠山正雄 ペン書

先日はわざわざお手紙ありがとうございました。存候

かせにふかれて旅鳥只今は四国海岸をさまよひ居候

今夜は鞍の津泊、また本土へ舞戻り申すべく来月二日朝大阪
の予定也 着後即ちよつとお伺申度存居候

十月三十日朝 讃岐多度津にて 楠山正雄

〈住所・宛先〉大阪府下箕面村櫻井

〈消印〉不明

（裏面）（讃岐高松） 栗林公園 枕流亭

楠山正雄 明治十七年東京生まれ。演劇評論家・編集者・児童文学者。早稲田大学英文科卒業。早稲田文学社、読売新聞社、富山房などに勤める。演劇評論、後に児童読物の編集・翻訳などを手がけた。「シラノ・ド・ベルジュラック」を翻訳し、額田六福の脚色により「白野弁十郎」となり島田正吾、緒形拳の一人芝居として演じられた。

(041978-032)

註

1 昭和五年我が國の舞台芸術向上のために財団法人国劇向上会として設立される。坪内逍遙の著作権上演権などで運営され、四十年財団法人逍遙協会と改称。著作権失効後も活動が続けてきたが、平成二十四年財団登録抹消。演劇博物館の一機関として傘下に入る。